

“The onion broke” — 『蜘蛛の糸』と 『カラマーゾフの兄弟』をめぐる若干の考察

諫 早 勇 一

芥川龍之介の最もポピュラーな童話『蜘蛛の糸』（大正7年7月、「赤い鳥」創刊号初出）の材源については、既に山口静一氏による Paul Carus の “Karma” の指摘、片野達郎氏による釈宗演校閲、鈴木大拙訳述の『因果の小車』（明治31年）の発見など¹⁾により、大方の結論は出たと行ってよい。鍵陀多という主人公の名前を始めとして、これらの間に見られる歴然たる類似を考える時、『因果の小車』が『蜘蛛の糸』の第一義的な材源であることはもはや否定できない。

だが、これらの発見以前に材源とみなされていたドストエフスキイの『カラマーゾフの兄弟』と『蜘蛛の糸』のかかわりはどうなったのだろうか。確かに『因果の小車』の発見によりその第一義的な材源の座は譲り渡したとは言え、今なおその著しい類似性から、『カラマーゾフの兄弟』の一挿話（ここでは仮に「一本のねぎ」と呼ぶ）が『蜘蛛の糸』執筆の一契機になったと推測する人は少なくないと思われる。とりわけ、大正5年10月8日と大正6年7月26日の松岡譲あて書簡²⁾から、芥川が『蜘蛛の糸』を執筆する直前に『カラマーゾフの兄弟』を読んでいることが明らかな以上。

たとえば、吉田精一氏は「芥川文学の材源」と題した紹介の中で「直接には鈴木大拙訳カルマ「因果の小車」（1898）による」としながらも、「ドストエフスキイ『カラマーゾフの兄弟』第七篇第三「一本の葱」も関係あるか³⁾とつけ加えている。また、島田謹二氏は「芥川龍之介とロシア小説」の中で、芥川は「カルマ」を読みながら、「はっと思い出した。これと異曲同工の文章を前によんだことがある。忘れがたい文章だったから、すぐ気づいた。それはドストエフスキイの長編小説中の一エピソードなのであります⁴⁾と述べて、「カルマ」から『カラマーゾフの兄弟』の一挿話を思い出し、この二つが材源になったという論を展開している。

つまり、『因果の小車』の発見にもかかわらず、『カラマーゾフの兄弟』の「一本のねぎ」の挿話の持つ意味は必ずしも否定されてはいない。依然としてこの挿話と『蜘蛛の糸』の間には影響関係を推定するに十分な類似性が認められ続けているのが現状だろう。しかし、この「一本のねぎ」の挿話に関してはこれまで若干の誤解があったのではなかろうか。そして、その誤解が誤まった類似性の理解につながってはいなかったらうか。そこで、以下この挿話について、ロシア語の原文、C. Garnett による英訳などを手がかりに若干考察してみたい。

* * *

¹⁾ 島田謹二氏は「一九五〇年の初めに、青山学院大学教授西村潤氏が「ドストエフスキイ

の『カラマーゾフの兄弟』第二巻七篇「アリョーシャ」の第三章「葱」の中にある童話によって芥川氏は『蜘蛛の糸』を書いた⁶⁾と氏に語ったことを記しているが、一般には両者の関係を最初に指摘したのは吉田精一氏で昭和30年のこととされている⁶⁾。ついで、小沢政雄氏は「日本文学とドストエフスキー」（『文学』、昭和31年9月）と題した論文で次のように述べた。

「ただ比較文学の参考のためにいえば、竜之介の「蜘蛛の糸」（大正七年四月）は、「カラマーゾフの兄弟」中の一挿話（第七編アリョーシャ、第三、岩波文庫本二巻二八六頁）からヒントを得たものと思われる。ストーリーは細部に至るまで符合しており、偶然の一致とは考えられない。竜之介は、大正五年十月八日附、松岡譲宛での端書でカラマーゾフを読んだ旨報じているから時間的にも無理な推定ではあるまい。ただこのような些々たる一挿話から『蜘蛛の糸』のような渾然たる珠寶を作り上げた芥川の才能に改めて脱帽しなければならぬ。」⁷⁾

小沢氏は上記の文のカッコ内でこれが岩波文庫本によることを示唆しているが、まず、果して「ストーリーは細部に至るまで符合して」いるかどうか、岩波文庫本の訳者である米川正夫氏の訳をひいて検討してみよう。（ただし、引用は河出版全集による。しかし、この挿話に関しては、後述する大正6年の訳から河出版全集に至るまで、漢字、かな使い、句読点を除いてはほとんど変化がない。）

『昔々あるところに、意地のわるいお婆さんがいたんですとさ。それが死んだとき、跡に何ひとついい行ないが残らなかったの、サタンたちはお婆さんをつかまえて、火の湖へ投げこんじゃったの。ところが、お婆さんの守り神の天使は、何か神さまに申し上げるようないい行ないがあのお婆さんにないかしらんと、じっと立って考えているうちに、やっとあることを思い出したので、神さまに向かって、あのお婆さんは畑からねぎを抜いて来て、こじき女にやったことがあります、と言ったのよ。すると神さまは、ではおまえ一つそのねぎを取って来て、湖の中にいるお婆さんのほうへさし伸ばして、それにつかまらしてたぐるがいい。もし首尾よく湖の外へ引き出せたら、お婆さんを天国へやってもよい。またもしねぎがちぎれたら、お婆さんは今の場所へ、そのままおかれるのだぞ、とこういうご返事なんですとさ。天使はお婆さんのところへ走って行って、ねぎをさし伸べながら、そら、お婆さん、これにつかまっておたぐりと言って、そろっと気をつけて引き始めたのよ。そうして、もう大かたひき上げられたところへ、湖の中にいるほかの餓鬼どもが、お婆さんが引き上げられているのを見て、自分らもいっしょに出してもらおうというので、みんなでそのねぎにつかまりだしたの。すると、そのお婆さんは意地のわるいわい女だから、みんなを足で蹴散らしながら、〈引いてもらってるのはわたしだよ、おまえさんたちじゃありゃしない、わたしのねぎだよ、おまえさんたちのじゃありゃしない〉とそう言うが早いか、ねぎはぶつりと切れちゃったのよ。そして、お婆さんはまた湖へ落ちて、今までずっと燃え通しているんだって。天使は泣く泣く帰ってしまいましたとさ』⁸⁾

—米川正夫氏のこの訳はなるほど『蜘蛛の糸』と酷似している。「芥川龍之介とポール・ケ

ーラス」で述べられた山口静一氏の言葉を借りれば、「どんな悪人にも慈悲の心があってそれが救いへの契機となること、しかしまた、自分さえよければというエゴイズムが結局は他人ばかりでなく自分をも破滅に導くものであること。そういうテーマを、ふたつの話は共通してもっている。しかもお婆さんとカンダタ、火の湖と地獄の血の池、神様とお釈迦さま、乞食女と蜘蛛、一本の葱と蜘蛛の糸、これらはほとんど完全に相対照しているといつてよい」⁹⁾だろう。だが、山口氏の言葉のテーマに関する前半部はさておき、「完全に相対照している」という後半部は、米川正夫氏の訳以外を見ながら再検討する余地が残っている。とりわけ、その中心となるべき「一本のねぎ」と「蜘蛛の糸」の対応については。

芥川が『カラマーズフの兄弟』を何によって読んだかはまた後にも触れる問題だが、島田謹二氏は Constance Garnett の英訳本 (1912) によるとしてその個所をひいているので、次にその部分を見てみたい。(ただし、島田氏の引用には脱落、誤植も見られるので、引用は Everyman's Library, 1967によった。)

Once upon a time there was a peasant woman and a very wicked woman she was. And she died and did not leave a single good deed behind. The devils caught her and plunged her into the lake of fire. So her guardian angel stood and wondered what good deed of hers he could remember to tell to God; 'She once pulled up an onion in her garden,' said he, 'and gave it to a beggar woman.' And God answered: 'You take that onion then, hold it out to her in the lake, and let her take hold and be pulled out. And if you can pull her out of the lake, let her come to Paradise, but if the onion breaks, then the woman must stay where she is.' The angel ran to the woman and held out the onion to her. 'Come,' said he, 'catch hold and I'll pull you out.' And he began cautiously pulling her out. He had just pulled her right out, when the other sinners in the lake, seeing how she was being drawn out, began catching hold of her so as to be pulled out with her. But she was a very wicked woman and she began kicking them. 'I'm to be pulled out, not you. It's my onion, not yours.' As soon as she said that, the onion broke. And the woman fell into the lake and she is burning there to this day. So the angel wept and went away.¹⁰⁾

そして、この英文をひいた後、島田氏は次のような解説をこれに付している。

「この英訳をお読みになるとおわかりになるように、これは一つの昔話でございます。——一人の意地の悪いお婆さんが死んで、火の湖へ投げこまれる。でもこのお婆さんは、かつて乞食女に葱をくれてやったことがあります。そういうたった一つの善行を、守り神の天使は神様に言上する。もしもその葱でお婆さんを火の湖から助け出せたら、天国へやってもよいと神様がおっしゃる。天使はそのお言葉通りに致します。葱の力でお婆さんを大方引き上げようとした所へ、湖のほかの餓鬼どもがその葱につかまりはじめます。お婆さんはみなを蹴散らして、「これは私の葱だよ——」と叫びます。その一刹那、葱はぶつと切れて、お婆さんはもとの火の湖に落っこってしまい、今でも燃え続けている。——そういうお話でございます。」¹¹⁾

だが、残念ながら島田氏の解説は「この英訳を」読んでわかる内容とはかなり遠い。むしろ、ここに出てくる「意地の悪いお婆さん」、「乞食女」、「火の湖」、「守り神の天使」、「餓鬼ども」といった世界は米川正夫氏の邦訳の世界と直結していて、Garnett の世界とは結びあわない。例を挙げよう。なぜ “there was a peasant woman and a very wicked woman she was” からこの女性が「お婆さん」になるのだろうか。彼女は「意地の悪い農婦」と訳されるべきだろう。そして、それより問題なのは “the other sinners……began catching hold of her” の部分だ。島田氏は「その葱につかまりはじめます」と解説しているが、前後に繰返される her を見れば明らかのように、この her は peasant woman をさす。（当然ながら onion は it で受けてある。）つまり、the other sinners は “onion” につかまり始めたのではなく、peasant woman につかまり始めたのだ。では次にこの “onion” とは何だろうか。日本語では普通これは「タマネギ」と訳され、いわゆる長ネギにはこの語はまず使われない。もちろん、her garden から引き抜いた以上、食用のタマネギに細長い部分がついていることは十分考えられるが、それでも細長い長ネギのイメージ（それは読者に蜘蛛の糸を想起させる）とはかなり違う。とすれば、“the onion broke” はどう解されるべきだろうか。一番素直に読めば「タマネギがこわれて」だが、せいぜい「タマネギが（細長い部分から）ちぎれて」ぐらいまでしか考えられず、長いネギが「ぶつりと切れ」るイメージを見るのは芥川の『蜘蛛の糸』あるいは米川正夫氏の邦訳による先入観なしには不可能だろう。

整理して言えば、米川正夫氏の邦訳、島田氏の解説は共に、長いネギの途中にお婆さんがつかまり、その後ろ端に罪人たちがつかまるというイメージを呈示しており、これは長い蜘蛛の糸の途中に毘陀多がつかまり、その後ろ端に罪人たちがつかまるという芥川の『蜘蛛の糸』のイメージと即対応している。しかし、Garnett の英訳を先入観なしに読めば、そこに浮かぶイメージはタマネギに意地悪女がつかまって（天使が先の細長い部分を引き）、その意地悪女の身体のあちこちに罪人どもがしがみつくといいものではなからうか。「一本のねぎ」と「蜘蛛の糸」が「完全に相対照している」、「ストーリーは細部に至るまで符合している」との見方は、邦訳のひきおこした誤解に違いない。

では次に、ロシア語の原文ではいったいどうなっているのだろうか。多少煩雑になるが、当該箇所を引用してみたい。

《Жила-была одна баба злющая-презлющая и померла. И не осталось после нее ни одной добродетели. Схватили ее черти и кинули в огненное озеро. А ангел-хранитель ее стоит да и думает:какую бы мне такую добродетель ее припомнить, чтобы богу сказать. Вспомнил и говорит богу: она, говорит, в огороде луковку выдернула и нищенке подала. И отвечает ему бог: возьми ж ты, говорят, эту самую луковку, протяни ей в озеро, пусть ухватится и тянется, и коли вытянешь ее вон из озера, то пусть в рай идет, а оборвется луковка, то там и оставь бабе, где теперь. Побежал ангел к бабе, протянул ей луковку: на, говорит, баба, схватись и тянись. И стал он ее осторожно тянуть и уж всю было вытянул, да грешники прочие в озере, как увидели, что ее тянут вон, и стали все за нее хвататься, чтоб и их вместе с нею вытянули. А баба-то была злющая-презлющая, и почала она их ногами брыкать: “Меня тянут, а не вас, моя луковка, а не ваша”.

Только что она это выговорила, луковка-то и порвалась. И упала баба в озеро и горит по сей день. А ангел заплакал и отошел». ¹²⁾

主人公の баба が お婆さん か、 peasant woman かは本論と直接かかわりがないので敢えて触れずに、まず “began catching hold of her” にあたる “стали все за нее хвататься” (下線は引用者、以下傍点も同じ) の個所から見て行こう。ロシア語の性は英語の性とはかなり違っているため、下線を付した人称代名詞の三人称単数女性対格が баба を指すとは即断できず、他に луковка を指す可能性も考慮しなければならない。しかし、少し前の “Побежал ангел к бабе” (天使は баба の方へかけて行った) から見て行くと、つづく “протянул ей луковку” (彼女に луковка をさし出した) の ей は明らかに баба を指す。そして、その後のところに “луковка” につかまれという意味の人称代名詞はでてこない。次に “И стал он ее осторожно тянуть” で始まる文を見ると、“как увидели, что ее тянут вон, и стали все за нее хвататься, чтоб и их вместе с нею вытянули” とこの人称代名詞が4回繰返されていることがわかる。しかも、この人称代名詞は4つとも同じものを指すと考えなければおかしい。もちろん、これが “луковка” を指すと考えることも無理ではないが、意味を考え(ねぎを引き、ねぎにつかまり、ねぎと一緒にひき出される、では特に最後がしっくりしない)、前文の人称代名詞を考えると、これらはみな Garnett 訳同様 баба を指すとするのが自然だろう。

なお、参考までに米川正夫氏以外による当該個所の邦訳をいくつか引くと、
 原久一郎氏(新潮文庫)「みんなこぞってその葱にしがみついた」¹³⁾
 中山省三郎氏(角川文庫)「みんなその葱につかまりだしたの」¹⁴⁾
 小沼文彦氏(筑摩版全集)「みんなしてそのお葱につかまりはじめたのです」¹⁵⁾
 北垣信行氏(講談社文庫)「みんなしてその女にしがみついて」¹⁶⁾
 池田健太郎氏(中央公論, 世界の文学)「我も我もお婆さんにつかまりだしたの」¹⁷⁾
 原卓也氏(新潮, 世界文学)「みんなして女にしがみついたんですって」¹⁸⁾
 江川卓氏(集英社版, 世界文学全集)「みんなしてお婆さんにつかまりました」¹⁹⁾
 とあって、баба ととる方向に修正されつつあることがわかる²⁰⁾。

次に英語で “the onion broke” と訳された “луковка-то и порвалась” を見てみよう。まず “луковка” の意味だが、17巻の辞典によれば “1. То же, что луковица (во 2-м знач.). 2. То же, что луковица (в 4-м знач.).”²¹⁾ 即ち “луковица” の2, 4の意味に同じとある。そこで、“луковица” の第2, 第4の意味を見ると、4は時計の意味でこの場合明らかに無関係なので、2の方がこれに当たることがわかる。そして、2には “Головка лука или чеснока”²²⁾とあって、これがゆり科の植物(ねぎ、にんにく)の丸くなった根・茎を指すことを教えてくれる。つまり、лук が ねぎ 全体を示すのに対し、もっと タマネギ の部分を表わすと考えられよう。ちなみに露和辞典をいくつか引くと、「球塊(にんにく、ねぎの); たまねぎ」²³⁾(岩波)、「鱗茎; たまねぎ」²⁴⁾(三省堂)、「たまねぎ、にんにくなどの玉」²⁵⁾(博友社)、「一個のたまねぎ」²⁶⁾(ナウカ)とあり、スミルニツキイの露英辞典には “an onion”²⁷⁾ とある。баба がつかんだのは、この タマネギ の部分と考えるのが妥当だろう。(だが、参照した限りでは邦訳はすべて「ねぎ」、「葱」とあって、「タマネギ」と訳したものは一つもない。しかし、国語辞典によれば²⁸⁾ 「ねぎ」とはいわゆる長ネギのことだ。)

つづいて“порвалась”だが、この“порваться”という語は「ちぎれる、切れる、裂ける、破れる」などいろいろな意味を含む語で、ここでの用法を即断することはできない。また、スミルニツキイの露英辞典には“break, be torn”とある。そこで、邦訳を引くと、「葱はブツリと切れてしまい」（原久一郎氏）、「葱はぶつりと切れちゃったの」（中山省三郎氏）、「お葱はぶつりと切れてしまいました」（小沼文彦氏）、「葱がぶつりと切れて」（北垣信行氏）、「ねぎはぶつりと千切れてしまい」（池田健太郎氏）、「葱はぶつんとちぎれてしまったの」（原卓也氏）、「ねぎはぶつりと切れてしまいました」（江川卓氏）とあって、どれも似たようなイメージを呈示している。ただ、この部分の前に“а оборвется луковка”とあること（“оборваться”の方が「ちぎれる」意味が強い）を考えあわせると、タマネギの部分がちぎれてとれるイメージが一番近いようにも思えるが、いずれにせよ長ネギが糸のように途中でぶつりと切れるのとは異なっていよう。

しかし、あまりロシア語の原文にこだわりすぎても危険だろう。要は芥川が何によって『カラマーゾフの兄弟』を読んだかにかかっており、原文と邦訳の比較は本質的な問題ではないのだから。

さて、即ち述べたように、島田氏は芥川が1912年の Garnett 訳（Wellek によれば、『カラマーゾフの兄弟』の最初の英訳²⁹⁾）を読んだと推定し、松本健一氏らもこの説を支持しているが³⁰⁾、国松夏紀氏は芥川の蔵書にある Garnett 訳の発行年が1923（大正12）年であることを指摘して、この説に疑問を投げかけた³¹⁾。しかし、かわりに国松氏の言及している米川正夫氏によるロシア語からの最初の直接訳³²⁾は、この挿話の含まれた中巻が大正6年9月28日に発行されていることから可能性まで否定することはできないとは言え、上巻の出た大正6年6月29日以前の大正5年10月8日に芥川が『カラマーゾフの兄弟』を読んでいることが明らかな以上、眼に触れた可能性は少ないと考えるべきだろう。また、既に大正3、4年に森田草平氏訳が出たりしているが³³⁾、これらはロシア語原文からの訳ではなく、英語に堪能でロシア文学を英訳で読破していることを誇らしげに書いた³⁴⁾芥川が重訳によったとは考えにくい。とすれば、蔵書の発行年との矛盾はあるにせよ、芥川は Garnett 訳によって『カラマーゾフの兄弟』を読んだと考えるのが最も自然だろう。（たとえ重訳によったとしても、上の論旨にはあまり関係がない。）

従って、やはり Garnett の英訳を正確に読むことが、『蜘蛛の糸』とのかかわりを知る一番の手がかりであることは間違いなからう。そこで、もう一度確認すれば、『カラマーゾフの兄弟』のこの挿話を「一本のねぎ」と呼ぶことがそもそもおかしいと言える。（近年の邦訳のいくつかはこの章を単に「ねぎ」と訳している。）むしろ、直訳すれば「一個のタマネギ」であり、意地悪女はタマネギにつかまり、罪人どもはその女の身体につかまる。そこから浮かぶイメージは、決して「蜘蛛の糸」に隗陀多がつかまり、その下に罪人どもがつぎつぎとつかまるイメージと対応してはいない。邦訳の与えた誤解は捨てられなければならない。

* * *

『因果の小車』の材源がつきとめられた後、幾人かの批評家は中空に光る切れた蜘蛛の糸に芥川の独自性を読みとろうとした³⁵⁾。それは『因果の小車』の発見により、従来の「救ひと光明とに連り得る素質を持ちながら、その素質に徹し得ない弱さをも同時に与へられてゐる」「人間の相」³⁶⁾を描いた、といった解釈（それならば、『因果の小車』の主題とさほどかわらない）から、より芥川固有の世界の探索へと向かい始めた当然の結果でもあるが。

そして、このように芥川固有の世界がますます「蜘蛛の糸」に密着してとらえられようとするとき、『カラマゾフの兄弟』の一挿話の持つ意味はより稀薄になって行くのではあるまいか。海老井英次氏はラーゲルレーヴ著「キリスト伝説集」への書込み（大正8年頃）「自分ノ書イタ『蜘蛛の糸』ト云フ御伽噺ト甚ヨク似テキルノデ変ナ気ガシタ東西デ恐シクヨク似タ話ガアルモノダト思フ」から、『カラマゾフの兄弟』の一挿話が『蜘蛛の糸』執筆にかかわりのないことを説いたが³⁷⁾、大正5-6年に芥川が英訳を読んだ時も、Garnettの“the onion broke”は特別な意識をとどめないまま忘れ去られたと考えて遠くはあるまい。この挿話と『因果の小車』とのつながりは、芥川には遂に自覚されなかった³⁸⁾と思われる。

注

- 1) 安田保雄氏も「『蜘蛛の糸』の原典とその著者について」、『比較文学』第13巻、昭和45年10月（安田保雄「比較文学論考 続篇」、学友社、昭和49年再収）において片野氏の論を確認している。
- 2) 大正5年10月8日「今年前二時だ 今日久米が新思想を持つてやつて来た さうして夜十時半頃かへつた そのあとでねられなかつたのでカラマゾフをよんだ」
大正6年7月26日「やつとカラマゾフが完りに近づいた 小説もあの位長いとげんなりする が随分感心した」
「芥川龍之介全集 第十巻」、岩波書店、昭和53年、p.324、p.382.
- 3) 吉田精一「芥川文学の材源」、富田仁編集「比較文学研究 芥川龍之介」、朝日出版社、昭和53年所収、p.13.
- 4) 島田醜二「芥川龍之介とロシア小説」、『比較文学研究』第14号、昭和43年9月、p.22. なお、同論文は島田醜二「日本における外国文学」上巻、朝日新聞社、昭和50年に再収されている。
- 5) 同、p.38.
- 6) 海老井英次編「鑑賞日本現代文学11 芥川龍之介」、角川書店、昭和55年、p.119参照。なお、前述の安田保雄氏は昭和33年と書かれているが（「比較文学論考 続篇」p.201）、昭和30年に既に指摘されていたと思われる。
- 7) 小沢政雄「日本文学とドストエフスキー」、『文学』第24巻、昭和31年9月、p.8.
- 8) 米川正夫訳「ドストエフスキ全集12 カラマゾフの兄弟上」、河出書房新社、昭和44年、p.416.
- 9) 山口静一「芥川龍之介とポール・ケーラス——『蜘蛛の糸』とその材源に関する覚書き再論——」富田仁編集前掲書、p.289.
- 10) Dostoevsky, *The Brothers Karamazov*, translated by Constance Garnett, London, 1967, pp.365-366.
- 11) 島田前掲論文、p.23.
- 12) Достоевский, Ф. М. Полное собрание сочинений в 30 томах. Том 14, Л., 1976, стр. 319.
- 13) 原久一郎訳、新潮文庫第3巻、昭和36年、p.66
- 14) 中山省三郎訳、角川文庫中巻、昭和43年、p.138
- 15) 小沼文彦訳「ドストエフスキー全集10 カラマゾフの兄弟I」、筑摩書房、昭和38年、p.388.
- 16) 北垣信行訳、講談社文庫中巻、昭和47年、p.293.
- 17) 池田健太郎訳「世界の文学17 カラマゾフの兄弟I」、中央公論社、昭和41年、pp.452-453.

- 18) 原卓也訳「新潮世界文学15 ドストエフスキーVI」, 新潮社, 昭和46年, p. 415.
- 19) 江川卓訳「集英社版 世界文学全集45 カラマーゾフの兄弟I」, 集英社, 昭和54年, p. 447.
- 20) ただし, これらの訳の初出は必ずしも定かでないので発表年代順に並べてはいない。
- 21) Словарь современного русского литературного языка в 17 томах, Том 6, М.-Л., 1957, стр. 394.
- 22) Там же, стр. 393.
- 23) 八杉貞利「岩波ロシア語辞典」, 岩波書店, 昭和40年, p. 577.
- 24) 井桁貞敏編「ロシア語和辞典」, 三省堂, 昭和46年, p. 370
- 25) 木村彰一他編「博友社ロシア語辞典」, 博友社, 昭和50年, p. 511.
- 26) ザルービン・ロジェーツキン共編「現代露和辞典」, モスクワ, 1964, (ナウカ, リプリント), p. 292.
- 27) Русско-английский словарь, под общим руководством А.И. Смирницкого, М., 1965, стр. 274.
- 28) 「広辞苑」, 「岩波国語辞典」, 「小学館新選国語辞典」など参照。
- 29) Wellek, R. A Sketch of the History of Dostoevsky Criticism, In Discriminations: Further Concepts of Criticism, New Haven, 1970, p. 318.
- 30) 松本健一「ドストエフスキイと日本人」, 朝日新聞社, 昭和50年, p. 132など参照。
- 31) 国松夏紀「芥川龍之介におけるドストエフスキイ——遺稿『闇中間答』を中心に——」, 「比較文学年誌」第15号, 昭和54年3月, p. 86.
- 32) ドストエフスキイ「カラマーゾフの兄弟」米川正夫訳, 新潮社。上巻は大正6年6月29日, 中巻は大正6年9月28日, 下巻は大正7年1月28日発行され, それぞれ1-5. 6-9. 10-13編を収めている。
- 33) 小沼文彦「ドストエフスキー」, 福田光治他編「欧米作家と日本近代文学 ロシア・北欧・南欧篇」, 教育出版センター, 昭和51年所収, p. 149参照。
- 34) 例えば, 大正2年8月12日の浅野三千三あて書簡(全集10巻, p. 96)など参照。
- 35) 例えば, 佐藤泰正「芥川龍之介の児童文学——『蜘蛛の糸』小論」, 「国文学」, 昭和46年11月, 平岡敏夫「芥川龍之介 抒情の美学」, 大修館書店, 昭和57年など参照。
- 36) 片岡良一「芥川龍之介の『蜘蛛の糸』」, 「日本文学研究資料叢書 芥川龍之介II」, 有精堂, 昭和52年所収, p. 135.
- 37) 海老井英次編前掲書, p. 119参照。
- 38) 同, p. 120参照。